

第7回小山町の教育のあり方調査研究委員会 議事録

- 1 開催日時 令和5年10月27日（金）午後2時30分開会
- 2 開催場所 小山町役場 大会議室
- 3 出席委員 武井敦史委員長、岩田祥吾副委員長、池谷弘委員、
田中清子委員、山口純委員、斎藤美栄委員、杉本奈々委員
臼井聖香委員、相原正和委員、佐藤教諭
- 4 出席した事務局職員等
野木雄次教育次長、伊藤和彦学校教育課長
井上幹夫学校教育専門監、坂本竹人こども未来課長
中澤芳文学校教育課長補佐、池谷秀之こども未来課長補佐
- 5 会議次第
 - (1) 開 会
 - (2) 教育長あいさつ
 - (3) 委員長あいさつ
 - (4) 議 事
 - ア 報告書について
 - ・当面(今後5年を目途)の対策について
 - ・各委員の意見(事例等)について
 - イ その他
 - ・小山町の教育のあり方調査研究委員会の今後について
 - (5) 閉会
- 6 議事録

(1) 中澤学校教育課長補佐が開会を宣言した。

(2) 教育長あいさつ

教育長：この委員会ですけど第7回目になります。私が回を追う毎に思っていることが2つありまして、1つ目は、私なりの小山町の教育のあり方のイメージが、回を重ねるごとに自分なりに見えてきたような気がします。それから2つ目ですけども、これは回数の問題ではないかもしれないですが、庁内（役場内）で、この委員会のことが話題になってきています。今後この委員会が出す報告書を様々な意味で注目しているということが伝わってきます。それだけに我々なりに検討を重ねていく必要

があると考えています。今日もぜひ様々な立場からのご意見をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(3) 委員長あいさつ

武井委員長：今教育長の方から回を重ねるごとに見えてくるものがあるというお話をいただいて、それを私自身も実感しています。これから10年後20年後に小山町に来た時に良いところだな、こんなところで子育てができる町になったら素晴らしいなと思うと同時に、私たちはこの委員会を7回重ねてきましたが、私たち以外の方々は恐らく何も見えていない段階だと思います。その中でこの委員会だけが何か全く違うリアリティで物事が進んでいることになると、町全体として動けないだろうなと。今回ですが、たたき台を議論して、年度内に後2回委員会を開催して、一つのまとまりをつけるということになろうかと思います。願わくばですが、これが報告書を作るための委員会ではなく、報告書がちゃんと使われて、まだ不透明な部分は多分に残しているが、小山町の教育の改善に向けて実際に動けるまでは何とか考えてみたいと思います。よろしくお願いいたします。

(4) 議事

武井委員長進行

(ア) 報告書について

- ・当面(今後5年を目途)の対策について
- ・各委員の意見(事例等)について

議事(ア)について伊藤学校教育課長が下記の通り説明した。

委員の皆様には、委員会開催に先立ち一読していただくため、事前に報告書の案を郵送させていただきました。

全体的なイメージを掴んでいただくための、たたき台として、事務局案を作成していますので、皆様から意見をいただき報告書を仕上げたいと思います。

では、目次をお願いします。前回の委員会時にアウトラインの案をお示ししましたが、他市町の報告書等を参考に1～8の大きな枠組みの構成を考えました。

1の、はじめにでは武井委員長からメッセージをいただき、2に委員名簿、3にあり方調査研究委員会設置要綱と続き、4は教育環境の現状と課題、5では以前実施しましたアンケート結果について、記載しております。6は、今まで開催してきましたあり方検討委員会の議事概要を、最も重要なのが7の町立こども園、小学校、中学校の今後についてです。ここを委員の皆様の見解をまとめて記載したいので、さまざまな意見をいただきたいと思います。(1)から(3)はこども園、小・中学校の内容を記載し、(4)は、まとめとありますが今後の工程について訂正をお願いします。そして(5)として配慮

事項を追加したいと考えております。

最後に8として、教育長からのメッセージをいただいて締める予定です。

また、別に用意してあります資料1につきましては、武井先生に考えていただいた試案であります。こちらの資料についても参考にしながら、今後5年を目途とした対策や、全体の組み立てなどを含めて、意見をいただき最終案を作成したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、本あり方検討委員会は、当初では全8回の予定でしたが1回増やして全9回にしたいと委員長からの申し出がありました。委員の皆様が反対が無ければ、2月6日に第9回を開催したいと思っております。案内はまた別途通知させていただきますのでよろしくお願いいたします。

また、資料1の内容に基づき武井委員長から説明があった。

相原委員：校則に関してですが、中学校の校則はもう少し緩和して、自由性を作り、外部から介入しやすい形にする方が良いと思う。小山町ならではの教育を考えた時に、例えば、小山町は国際友好協会を通じてミッション市と交流があるので、中学生だったら夏休みを利用して留学できるとか、そういう他の団体の力も使って、教育に生かしていければ、特色なることもできるのかなとは考えていました。個人的な意見になりますが、小山町の学区はそれぞれ地域性がある教育が展開されているので、例えば統合がなくとも小学校と中学校で交流を図ることによって、小学生が中学生のお兄さん、お姉さんを見てこうなりたいたいとかに繋がると思うし、色々な教育の仕方は考えられるのかなと思いました。

山口委員：試案2ですが、プロジェクト型の学習を3校から選択するという方法は子供の主体的な選択に繋がって良いなと思う。一方で、例えば中学校3校であれば、3校別々の場所で何か普段学んでるその途中経過とか、発表とか同じ一つのプロジェクト型の取り組みを3校でやって、それを年間に何回とか、月に1回集まって発表することで高め合うこともできるかなとも思いました。また、3校の先生方も、一つのこのプロジェクトのことを取り組むので、教員の力量向上とかにも繋がると思う。

杉本委員：事務局の報告書案を読ませていただきましたが、重たい内容にも関わらず分かりやすくまとめていて素晴らしい内容だと思う。武井先生の試案についても勉強になりましたし、難しい内容でしたけれど実現できれば、自分が通いたいと思う程でした。

臼井委員：資料については、これまで、この委員会で話し合ってきたことを含め分かりやすくまとまっていると思います。そしてどれも実現したらとても良いと思うが、「AIドリル」とは何か。

委員長：昔のドリルとは違い、ドリルの進め方によって分岐していく。なおかつそれに対してオンラインの授業が展開されるみたいなイメージで見たらいいと思う。例えば、問題をつまづいた子のつまづきにに応じて次の教材や次の授業が用意されていて学んでいくという形になる。もちろん学力を伸ばしたい子は早く進められるので、差が生じてしまうが、そのことで子供の中で変な序列化にならないように、協同的な学びをもう一方で用意することを教員側も、気をつけなければならない。

山口委員：すでに小山町が導入しているタブレット上にも、AIドリル対応のソフトはインストールされていていて、学年によっては活用しています。

委員長：このAIドリルはこれから劇的に進化していくと同時に学校で導入していく。多分これを見無視して、学校は成り立たなくなってくると思う。そうすると、全体的に始めると考えた時にどこからスタートするかということ、須走になるかなと頭に浮かぶ。

池谷委員：私はこの報告書案にある須走の小・中一貫校にする案には賛成している。須走地区の特色として、自衛隊の子供たちが多く、要するに全国レベルで動き回る子供たちが集まっている。そして財政面的にも支援が得られると思う。

委員長：例えば、まずAIドリルを先進的に取り入れます。それから例えば外部講師みたいなものがあつたときに、月に2回ぐらい、年に20回とか30回とか外部講師の先進的な講師を招くとする。これを須走の子は対面でやります。他の学校はオンラインでそれを聞きます。その代わりに、そのお金をどうするのかっていうことになって、それについては須走の財産区からご協力いただけないかと。そうすると須走の自治会としてある程度、地域の方に賛成をいただく必要があるし、賛成してもらおう見込みがあるかが一番心配。

池谷委員：個人的な見解ですと、須走地区の人たちは結構やる気のある、若い人もたくさんいるので、かなりの地域からの協力は得られると思う。

委員長：あともう一つは、自衛隊に学校へ来てもらって授業をしてもらう取組はしていますか。

事務局：していない。

委員長：町から頼めば、自衛隊に授業をやってもらうことも可能だと思う。そうした自衛隊の授業が実現できれば、一つ大きな小山町にとっての売りになるので、そこもできれば狙いたいと思うところ。

岩田委員：僕が考える小山町の教育特徴はAIとかオンラインではなく、もちろんそれが必要なことはわかってるが、やっぱり対面が良い。先日実施した、小学校3校の交流事業を通してそれを改めて感じた。須走に関しては、須走に限らずですが、地域の方を抜きにして話を進めることは地域からの反発がでるかもしれないので心配している。しっかりと説明をすれば、協力してくれる素晴らしい地域の方々ばかりだが、進め方によっては、反発される可能性もあるので不安なところ。

委員長：実は私の中でも明確に、これから学校がどうなっていくか言えない部分がある。上手くいくかもしれないし、上手くいかないかもしれない。そうした将来の不確定さが正直悩ましいところ。それから、学校の先生方は、一般論で言うと小規模の地域であればあるほど今までの形をそのまま続けていくイメージを強く持っている。そうすると、何故ここにきて教育あり方を見直すのかという声が上がらないとは限らない。この委員会で読まれない報告書を出しても意味がないので、しっかり読んでもらって、できるところから動き始めてもらうことが目的なので、先生方の声はここで聞いておきたい。

田中委員：これまでにこの委員会で出た情報を学校の先生達には小出しに提供をしている。ですが、今の私がそうであるように明確なゴールが見えないからこそ、どうするのが一番良いのか、自分の中でもはっきりわからないような状態なので、他の先生方も同じではないかと思う。やっぱりある程度の、何か方向というか目指すべきゴールがどこなのかは見えた方が良くと思う。

委員長：目指すべきところがどこかですよね。それが本当は人口増加だと言えれば良いが、そういうふうにはできない。だから私が考える複数の選択肢としてまず、今の子供がより幅広い人間関係の中で育って、経験が豊かになること。そして、あわよくば人口が増えること。増えなかったとしてもお互いの地域で互いに協力し合って学校を作る土台ができること。ここで様々な目指すべきところを検討するゆとりがあっても良いと思う。

岩田委員：委員長に同意です。正直なところ、人口増加を目指してるわけではなく、人口増加以外を考えるべきだと思う。

山口委員：10月13日に実施した小学校（成美・明倫・足柄）3校合同授業ですが、合同授業を行うにあたり、6月に3校の担任教諭と顔合わせをした。なぜかというところ小山中校区の3校の中で、教員同士の繋がりも作ろうとしたからです。また、校長先生や教頭先生の集まりの中で、4年生以上で何か1回ぐらいは学校間交流をしたいと話もあがっていて、これまでも打ち上げ花火的に、一緒にドッジボールをしましたとか、遊びましたってことはあったが、子供たちが積み重ねてきたことを披露するという形はなかったので、そういう形の方が、子供たちの学びの延長になるのではと考え、今回の合同授業の実施に至りま

した。実際に実施してみて、教員も子供も非常に反応は良かったという声はいただいている。本校の職員と振り返りした中であったのが、今回の対象学年を3・4年生にしたことが良かった。これが、5・6年生だと授業時間数的にも結構厳しいので、比較的時間にゆとりのある学年で実施が出来て、小山中の進学前に知った関係性をつくれることは良かった。一方で、バス送迎を含め移動をどうするか課題もあった。他にも今回のバス等の連絡調整を図る際には、各学校の教頭先生が窓口になって業務上負担を掛けてしまい、申し訳なく思う。やはり核となる人が必要であり、例えば3校で1人、連絡調整や企画をするハブのような人をおける仕組みがあるとやりやすいと感じた。

委員長：今、問題提起していただいた中で、難しい部分は、誰がどういうふうにするのかということ。教頭先生だと、ただでさえ忙しい業務を抱えているので厳しいでしょう。この問題を机上の空論にしないためには、何をどういう風に実際に思考して可能なものを実現していくか、そのための推進体制みたいなことをこの報告書で言及しておいた方が良いのではないかとこのように聞こえた。

相原委員：こども会のジュニアリーダーを3町（清水町・長泉町・小山町）で20年近く当番制でやっている。その3町で毎年、特に問題なく活動ができていているのは、中心となる人が必ず各町に1人いて、お互い連絡調整をして役員を集め、事前・事後研修会を企画・実施できているからだと思う。そうした核となる人は、もちろん負担は大きいですが、担ってくれる人を学校でなくとも、例えば教育委員会とかの中で、作るのもありかなと。そこに先生方も協力する形で入っていく。やはり企画調整する核となる様な母体を学校以外で1個作っても良いと思う。

委員長：例えば小山町の規模から各学校ごとに母体を作ることは難しい。そうすると、町で何らかの母体が必要という話に必然的になっていく。仮に母体が出来たとして、持続的にやるためには、誰か1人は中核になって考える人がいないとうまくまとまらない。その1人をどうするか。

佐藤教諭：一番円滑に進むのは教員が一番知っていることなので、教員が中心になることが一番だと思いますが、負担は大きい。今、研究の中で小規模校同士の連携が大事だと思って進めているが、その連携をうまく使って、効果がある教育方法だとか、効率的に進むような学校運営の方法と一緒に考える会を作るのも1つの方法だと思う。

委員長：来年度の配置で1人で良いから学校を兼務する、例えば小学校5校分を兼務する教員で、その代わり本校における授業は格段に軽減させた職員を1人でいいから配置することはできるか。

事務局：現時点では難しい。

委員長：正規職員だと負担が大きすぎるので、例えば町費教職員をあてる。あてるにしても誰でも良いわけではなく、学校のことが分かる力量のある人でなければならない。コミュニティスクールディレクターみたいな人がいるかどうか。

事務局：予算を抜きにして考えるならば、講師や支援員の中にできる人はいるかもしれない。

委員長：ここで結論づけるけるわけではないが、検討いただくことにして、どちらにしても、推進体制みたいなところは考えておく必要がある。

池谷委員：例えば小山町の中でもいろんな団体があるので、これをやってくれそうな団体に依頼をするのも手かなと考えている。

委員長：確かに NPO 等の団体でこの中身のプログラム自体を引き受けてくれる可能性はあるが、配置する子供を生かせるという点では、学校でなければできない。その難しさがある。あとは実際問題、教員が一律忙しいわけではないので、そういう人を見つけてポジションと仕組みを割り当ててそれで進めていくようにせざるを得ない。プログラム自体は色々な団体でできるが、学校とか教育委員会の内部に、その仕組みを調整する人がいないと成り立たない。そうしたことを報告書の段階では検討してほしいという記載ができると思う。

教育長：この委員会の関心というのは今のこともあるし、もう一方で 18 ページ以降のこともある。これについて議論はされたという認識でよいか確認をしておきたい。その上で、この報告書案に対する委員の皆さんからの意見が、ここで出尽くされたという解釈で良いか。

岩田委員：18 ページ以降に関しては、須走小と須走中の一貫校ということがでているが、それだけではなく、北郷小・中の一貫校や小山地区の小学校 3 校と小山中の一貫校のような話がなかったので、議論の中にあっても良いとは思った。

委員長：令和 4 年度の出生数 74 人からして、子の少なさを考えれば、18 ページ以降の案は、もはや全て不可能であると思う。これで意見が出尽くされて、この中でどれかを選ぶということは正直私にはできない。

教育長：恐らく、次の学校規模適正化委員会の時にこの委員会の報告書は内容的に重要視されなくなってしまう可能性がある。私は、今の子供たちのためには先ほど議論があったような形で、交流学习等を絶対やっていく必要があると思っている。出生数が減少する傾向は今後も続いていくわけで、もうやらざるを得ない状況まできている。その中で、こんな案があるけど、終わりですと言われたら、町としてこの委員会で話し合った内容よりも具体的な議論に入る。だからこそ、今日議論されたことを生かすためにも、将来的にこういうことが起こり

うる可能性を考えておかないと、報告書の力が発揮されないと思う。

委員長：私の考えでは、少なくともこれをペンディングする期間が必要なはずだ。そのペンディングする期間の間に学校間で維持できれば、学校統合しなくても教育の中身がある程度一緒になってくれば、それ以外の可能性が生まれてくるだろうと思っていた。しかしそれを待たずに、具体的な検討の動きが出てくるとなれば、何とかしなければならぬ。

教育長：ここで報告書の提言を示すことによって、最初の何年間かは、先ほど議論ができたことが可能になってくると思う。そうしないと、学校規模適正化の具体的議論に入ることは目に見えている。

委員長：報告書の書き方をうまく工夫する必要がある。出生数の少なさからして、1校しか町に学校がない状態になると、学校でどれだけの改革や改善ができるのかといえば、ほぼ何もできない状況でなってしまう可能性がある。そうした事態を阻止しておかないとやるべき試みはできなくなってしまう。今日これからそれを議論する時間が十分ないので、次回の委員会までの間に、皆さんにはしっかりと考えてきて欲しい。それまでの間に委員長案として、皆さんに方向性をだしてみる。

教育長：選択肢が1つである必要はないと思う。いくつかの選択肢として残しておき、その選択肢が議論をされて、こういうメリットがあるということを残すことがこの報告書。価値づけになる。

委員長：次回までに考える時間をいただきたい。恐らく次回に素案が出て、それで最終回までの間にそれをリファインすると同時に、この報告書を聞かせるための手立てというのを考えなければならない。

教育長：そうすると、次回検討することの1つ目は18ページ以降の協議内容、具体的なこと、それから2つ目は今日の話題の中心になったこと、18ページ以降の繋がりを本委員会としてどう明らかにするか。そして3つ目が、報告書をどのように皆さんへ周知したり理解してもらえるかという3点を次回検討することで良いか。

委員長：そうです。特に3点目は同時に推進体制のあり方でもあり、位置づけが曖昧なものであって、いわゆる会議の結論という形をとっていない。これをどういうふうに扱って欲しいかを考えることも含めて次回検討していきたいので、どうぞよろしく願いいたします。

(イ) その他

・小山町の教育のあり方調査研究委員会の今後について
議事(ア)の中で議論した。

(5) 中澤学校教育課長補佐が閉会とした。